

# しろあとだより

第 18 号

2019 年 3 月

高槻市立  
しろあと歴史館

## 土人形にみられる牛の毛色について

早田 さち子

### はじめに

しろあと歴史館では、二〇一九年一月四日から二月二四日まで、企画展「伏見人形 願いかなえる動物づくし」を開催した。

伏見人形は、伏見稻荷大社（京都市伏見区）の参詣土産として古くから作られていた土人形で、江戸時代中後期には全国に販路をひろげ、各地の土人形に影響を与えたといわれている。参詣土産であったことからか、五穀豊穡・商売繁盛、厄除け・病除けなどのご利益を期待した土人形も多い（1）。この企画展では、そうした祈りや願いの込められた伏見人形のうち、動物を題材としたものを紹介した。展示は、「神にまつわる動物たち」「幸せをよぶ動物たち」「悩みをとりさる動物たち」「生まれ年の動物たち」と四章で構成し、故・奥村寛純氏より寄贈された奥村コレクション（2）から、一八種の動物（狐・猪・馬・狛犬・龍・牛・鼠・猫・犬・猿・虎・兎・金魚・雀・鳩・鶏・蛇・羊）、計三二〇点を展示した。

本稿ではそのなかから、牛をかたどった人形についてその概要をのべるとともに、多く見られる白と黒のまだら模様の彩色について、その意味や背景を考察したい。

### 一 奥村コレクションにみられる牛の伏見人形

牛は、伏見人形に数多くみられる動物のひとつである。牛は家畜として、六世紀以来、土地を耕す犁などを曳いて農耕に用いられており（3）、農耕の神である稻荷神を祀る伏見稻荷大社の参詣土産にふさわしいものであった。また牛は、荷車を曳くのにも用いられたことから、街道や宿場町の風

### 目次

「土人形にみられる牛の毛色について」早田さち子…………… 1

景として旅の土産にふさわしいものでもあったのだろう。

奥村コレクションには、牛の伏見人形が六四点（うち一点は原型）含まれる。そのほとんどは昭和四〇〇〜五〇年代に入手された「丹嘉」「菱屋」両窯元のもので、戦前まで盛んに製作していた窯元「富士忠」のもので二点（うち一点は原型）、年代・窯元とも不詳のものが八点ある。

それぞれの人形の名称や主題は、奥村氏が整理したものに準じているが（1）、ここであらためて名称と特徴を整理し、主題の大別を試みた。以下、本稿ではこの名称を用い、伏見人形以外の土人形について言及する場合にも、便宜上同様とする。

・俵や大黒・宝珠を伴い、豊穡・富を象徴するもの

俵牛…背に俵を乗せる牛（図1）

撫牛…脚を折り頭を低く伏せた姿勢で、額に宝珠や大黒天像が付く牛

牛車…俵を積んだ荷車を曳く牛

宝珠牛…宝珠を背に乗せる牛

・草（瘡に通ず）を食べることから疱瘡除けとされるもの

一文牛…赤茶色の牛で背に〇に十文字の印、腹に小さな穴がある

寝牛…脚を折って伏せる牛、「臥牛」とも（図2）

・主題となる神や人物を背に乗せるもの

牛乗り天神…天神を背に乗せる牛

牛乗り童子…童子を背に乗せる牛、笠を持つものは牛乗り西行とも

・その他

立牛…四つ脚で立つ牛

坐牛…後ろ脚を折ってすわる牛

蒲団牛…背に布を掛けている牛

このうち「一文牛」「撫牛」の他は、ほとんどの牛が白と黒のまだらの毛色に彩色されている。菱屋製の「寝牛」のなかには黒ではなく紺色と白のまだらが一点みられる。ほかに黒牛が、菱屋製の「俵牛」に一点と、窯元不詳の「牛乗り天神」に二点みられる。

「一文牛」は疱瘡除けのまじないに用いられたもので、赤茶色に塗られている。目鼻などは描かれず、円で囲われた十字の文様が背中に描かれるのみである。この文様の意味することは不明だが、背に乗せた蒲団の表現とする説もある(4)。赤茶色は、疱瘡神が赤い色を嫌う、あるいは赤い色は魔を祓う、などといわれることから塗られたものであるうか。牛の毛色というよりは、まじないのための決まった色とみるべきだろう。

「撫牛」は額に三つの宝珠と大黒天の像をつけ、脚を折って伏せた姿勢の牛で、家運隆盛を願って祀られたという。目鼻などは描かずに黒一色に塗られるのが本来とされ、多くは黒一色である。この黒色も「撫牛」特有の色とするべきで、牛の毛色とは解しえない。ただし、丹嘉製の大型の「撫牛」二点は、宝珠と大黒天像の部分は金色に、牛の身体は白黒まだらの毛色に塗られている。

以上みてきたように、戦後収集された奥村コレクションの伏見人形においては、特殊な「一文牛」「撫牛」の彩色を除けば、主題・窯元にかかわらずほとんどの牛が、白と黒のまだら模様で彩色されている(5)。

まだら模様の形状や配置には傾向があり、大まかに分類すれば以下の(A)(B)二系統になる。

(A) 腹から脚にかけて白く、他は黒い。

黒に白い模様が入ることもある(図1)

(B) 頭と尻が黒く、脇腹から背中にかけては白い。

白い部分に黒い模様が入ることもある(図2)

ほとんどが(B)系統かそれに類似するまだら模様である。ただし、頭・尻の黒い部分の大小や、黒い模様の形状は一様ではない。(A)系統は、菱屋製の「俵牛」「車牛」の一部にみられる。

まだらの位置は、とくにへこみがあるなどの目印はなく、彩色する際に形状をきめて塗り分けているように見受けられる。それでもまったく気ま



図1 伏見人形「俵牛」(A)



図2 伏見人形「寝牛」(B)

まなわけではなく、丹嘉・菱屋・富士忠と三つの窯元とも、類似する傾向をみせていることは興味深く、この傾向が伏見人形全般に共通しているのか、他の土人形にもみられるのか、また古くからの傾向であるのか、考察していきたい。

## 二 江戸時代の版本にみられる牛の伏見人形

奥村コレクションは一部をのぞいて昭和時代の作例である。より古い事例をうかがい知るために版本の挿絵を参照したい(6)。各地の名所や産物を紹介する書物に描かれた伏見人形の牛は、どのような毛色であろうか。

宝暦四年(一七五四)『日本山海名物図会』四「京深草陶器」

..立牛(単色)

天明七年(一七八七)『拾遺都名所図会』卷四「深草之里」

..立牛(単色)

弘化元年(一八四四)『広益国産考』六之卷「人形彩色仕立あげの図」

..寝牛・俵牛・蒲団牛(Bに近いまだら)

元治元年(一八六四)『再撰花洛名勝図会』東山之部八「伏見街道群集之図」

..寝牛(Bに近いまだら)

この四件の資料を見る限りでは、一九世紀に入ってから、単色よりもまだら模様の色が、伏見人形の牛の典型的な毛色と認識されるようになった可能性が考えられるが、より多くの事例を集める必要がある。

前掲資料のうち注目したいのは、『広益国産考』である。「うし ちんなど」の黒のぶちの上へ にかわをうすくぬるべし 黒につや出てきれいになる也」と、黒いぶちを艶やかに仕上げる方法が特に記されている。同書の挿絵には三種類の彩色済みの牛が描かれており、いずれも一章でみた(B)系統に近いまだら模様の毛色である。

『広益国産考』は、実地調査をもとに多くの農書を著した大蔵永常が、晩年に自らの知識を集大成した書物であり、各種の工芸作物の加工法などが詳述されている。全八巻のうちの「六之巻」で、土人形の製作法を詳しく紹介しており、「形は伏見人形を求め…」と既製品の伏見人形から型を作る「抜き型」の方法を説明することから始めている。つまり手本は伏見人形であり、ここに記される彩色の方法も伏見人形の製法と推察される。奥村コレクションに多く見られる(B)系統のまだら模様は、これらの版本が刊行された一九世紀半ばにはすでに、伏見人形の牛の定番の毛色であり、その技法は各地に伝承されていたと知れる。

### 三 各地の土人形にみられる牛の毛色の傾向

奥村コレクションには、伏見人形以外にも各地の土人形(7)が含まれている。伏見人形と同じく昭和四〇〜五〇年代に収集されたもので、一部に古い作例も含まれるが、多くは収集当時かそれに近い時代の作と見受けられる。牛の主題やその毛色には地域によって傾向があるのだろうか。

奥村コレクションの各地の土人形にみられる牛の作例を、毛色により大別示したのが次頁の(表)である。毛色は、一章で示した(A)(B)に加え、伏見人形にはみられない「全身が白く、小さめの黒い模様が点在する」というまだら模様がみられたため、これを(C)とした。黒一色の牛は「黒」とし、その他の単色の牛については色名とともに「その他」の欄に示した。なお、(表)および本稿中での土人形の主題は、便宜上、伏見人形に準じた名称(一章参照)で表現した。

主題について概観すると、主に「俵牛」「牛乗り天神」「撫牛」とそれに類するものが、各地に広まっている。「俵牛」は五穀豊穡をねがうもので

農家を中心に需要があったものと思われる。「牛乗り天神」は天神信仰とともに広まったと考えられるし、「撫牛」は大黒を祀り家運隆盛を願うもので小品も多く、広く求められたのであろう。

白黒まだらの牛は、各地の土人形に見られるが、伏見人形と同じく(A)(B)の二系統ともみられるのは、滋賀県の小幡人形と、奈良県の出雲人形である。小幡人形(図3・4)は、中山道と御代参街道との分岐点である小幡(近江八幡市)で、伏見人形の技術を倣って江戸時代中期から作られている。牛の彩色も伏見人形の様式が踏襲されたのだろう。出雲人形(図5・6)は長谷寺(桜井市)の参詣土産として江戸時代末期から知られる人形である。伏見人形との直接的な影響関係は見いだせないが、ともに近畿



図3 小幡人形(滋賀県)  
「俵牛」(A)



図4 小幡人形(滋賀県)  
「牛乗り天神」(B)



図5 出雲人形(奈良県)  
「俵牛」(A)



図6 出雲人形(奈良県)  
「蒲団牛」(B)

表 奥村コレクション 各地の土人形にみられる牛の毛色

		(A)	(B)	(C)	黒	その他
近畿	伏見人形(京都府)	俵牛・牛車	俵牛・牛車・撫牛・立牛・坐牛・寝牛・蒲団牛・宝珠牛・牛乗り天神・牛乗り童子		俵牛・撫牛・牛乗り天神	
	小幡人形(滋賀県)	俵牛・俵牛乗り鼠	牛乗り天神・牛乗り童子		牛乗り童子	
	出雲人形(奈良県)	俵牛	蒲団牛			
	稲畑人形(兵庫県)				牛乗り天神	
東海	名古屋人形(愛知県)				撫牛	蒲団牛土鈴(白)
	起人形(愛知県)	俵牛土鈴・寝牛土鈴・牛乗り天神(灰と白のみだら)				
	高山人形(岐阜県)			牛乗り天神・立牛土鈴		
北陸	富山人形(富山県)			撫牛	撫牛	
東北	小坂人形(秋田県)		牛乗り天神			
	八橋人形(秋田県)			牛乗り天神		牛乗り天神(金)
	中山人形(秋田県)				宝珠牛土鈴	
	相良人形(山形県)			牛乗り天神	牛乗り童子	
	下川原人形(青森県)				撫牛	
	花巻人形(岩手県)				蒲団牛	撫牛(金)
	堤人形(宮城県)			牛乗り天神	牛乗り天神	
関東	今戸人形(東京都)				撫牛	撫牛(金)
四国	土佐人形(高知県)	蒲団牛土鈴				
中国	三次人形(広島県)				牛乗り天神	
	長浜人形(島根県)				牛乗り天神	
	百々人形(岡山県)				俵牛	
	倉敷人形(岡山県)				撫牛	
九州	古博多人形(福岡県)				蒲団牛土鈴・牛乗り童子・撫牛土鈴	牛乗り童子土鈴(焦茶)・寝牛土鈴(黄土)・撫牛土鈴(銅)
	津屋崎人形(福岡県)				千両箱牛土鈴・寝牛土鈴・蒲団牛土鈴・牛頭土鈴・牛乗り天神・牛乗り童子	俵牛土鈴(焦茶)・蒲団牛土鈴(焦茶)・寝牛土鈴(茶)・牛乗り童子(茶)
	門司ヶ関人形(福岡県)				牛乗り天神土鈴・立牛	
	能古見人形(佐賀県)	寝牛土鈴				

※ まだら模様 (A) = 腹から脚にかけて白く、その他は黒い。黒い部分に白い模様が入ることもある  
 (B) = 頭と尻が黒く、わき腹から背中にかけては白い。白い部分に黒い模様が入ることもある。  
 (C) = 全身が白く、小さめの黒い模様が点在する。

※ 「寝牛」「撫牛」の区別については曖昧さがあるが、ここでは仮に、牛の額に宝珠や大黒あるいはそれにかわる表現があるもの、ないし、頭を低く伏せて耳や角を体に沿わせて凹凸の少ない形状に表現されているものを「撫牛」とした。

地方の参詣土産である点は共通しており、嗜好や需要に近い傾向があった可能性はある。なお、(A)のみみられる愛知県起人形の牛は、黒に代わって灰色が用いられており、灰色と白のまだら模様である。

伏見人形にはみられない(C)のまだら模様は、秋田県の八橋人形(図7)と山形県の相良人形、宮城県の堤人形、富山県の富山人形(図8)と、岐阜県の高山人形にみいだせる。産地は点在しており作例も少ないため、現時点で指摘すべき共通点は見当たらない。

特筆すべきは、中国・九州地方には、白黒まだら模様の牛がほとんどみられないことである。まだら模様よりも黒や茶一色の牛が好まれるといった、地域的な好みが存在するのだろうか。なお、九州地方でわずかに一例みられる白黒まだらの牛は、佐賀県能古見人形の「寝牛土鈴」である。能古見人形は戦後、染織家の鈴木照次氏により創始された土人形であって、地域性よりも作者の個性が強く現れた結果と考えられよう。

中国・九州地方の土人形のうち奥村コレクションに比較的多く牛の作例が含まれているのは、ともに福岡県の古博多人形(図9)と津屋崎人形(図10)である。古博多人形は、文政年間から始まり、戦後は美術工芸品として海外にも知られるようになった博多人形のうち、江戸時代以来の様式を伝えるものを指す。伏見人形がそうであるように古博多人形もまた、各地の土人形に影響を与えており、津屋崎人形も古博多人形の流れをくんでい



図7 八橋人形「牛乗り天神」(C)



図8 富山人形「寝牛」(C)



図9 古博多人形「牛乗り童子」(黒)



図10 津屋崎人形「牛乗り天神」(黒)

る。中国地方のうち、黒一色の牛をみいだすことができる島根県の長浜人形や広島県の三次人形は、ともに古博多人形からの影響が指摘されている土人形である。

現時点ではあくまでも仮説であるが、古博多人形の影響をうけている土人形においては黒や茶一色の牛が定番で、白黒まだら模様の牛はみられないのかもしれない。本稿では奥村コレクションの限られた作例のみでの考察となったが、今後さらに作例を集め、また古博多人形の影響がどの地方の土人形にあらわれているのかも見定めた上で、考察を進めていきたい。

#### 四 絵画に描かれた白黒まだらの牛

伏見人形をはじめ各地の土人形の題材は、同時代の浮世絵や版本の挿絵などを参考にした可能性が考えられる。例えば、歌舞伎物や武者物の土人形では、役者絵や武者絵との類似性を指摘することができる(8)。

他にも「富士見西行」は江戸時代の絵画に多く見られる題材であるし、「牛乗り童子」は、室町時代以来、水墨画として描かれてきた「十牛図」や「牧童図」との共通性を感じさせる。また、七福神や天神、稲荷など信仰に関する人形においては、持ち物や服装、ポーズなど、図像として定型化され、神仏をそれと見分ける手段とされているため、絵画と土人形の間でも類似する点は多い。相互に参照するようなこともあっただろう。

よく知られた画題は画譜などの版本で紹介され、絵手本ともされた。土人形の造形への、絵画・図像の影響を念頭に置いたとき、牛の毛色についても、絵画作品の牛の描写からの影響を想定するべきである。

浮世絵や版本の挿絵に牛の描写を探すと、荷車を引く牛の集積地である車町や、車町から提供されて祭礼の山車を引く牛たち、牛の売買が行われた牛市、あるいは牛合せ(鬪牛)の場面に、他の毛色の牛たちとまじってまだら模様の牛を見出すことが出来る。

宝暦四年(一七五四)『日本山海名物図会』四「天王寺牛儉」(図11)

…(C)に近いまだら・背中が白い牛

寛政一〇年(一七九八)『西遊記』続編三「牛合せ」(薩摩国鹿野谷)

…(C)に近いまだら

天保五年(一八三四)『江戸名所図会』巻之一「高輪牛町」

…(B)(C)中間的なまだら

文久二年(一八六二)「東都三十六景 高輪海岸」二代歌川広重(図12)

…(B)(C)中間的なまだら

天保・明治(一八三〇)〜(一九二二)「山王御祭禮」歌川芳虎

…(B)(C)中間的なまだら・(A)に近いまだら

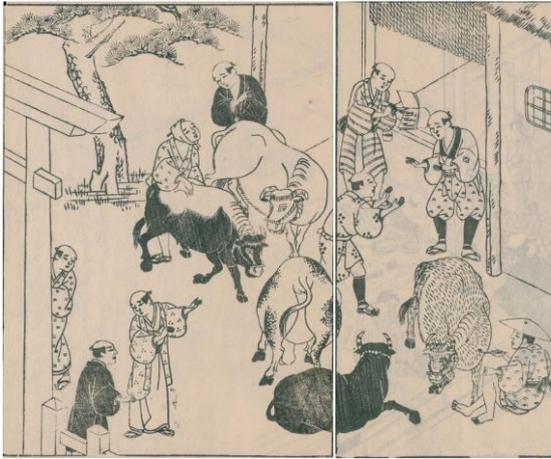


図11 『日本山海名物図会』四「天王寺牛儉」  
中央後ろ向きの牛が(C)・その左に背中白い牛  
(国会図書館デジタルコレクション)



図12 「東都三十六景 高輪海岸」(部分)  
(国会図書館デジタルコレクション)

多数の牛を描く場合、変化をつけようと多彩な毛色をそろえた結果、まだら模様の牛も表現されたのであろう。「東都三十六景 高輪海岸」(図12)では、白黒まだら模様の牛が、一頭のみ、しかも半身をクロウズアップした構図で描かれているが、これは印象にのこる目立つ毛色の牛を、と考えたからであろうか。あるいは、まだら模様の牛が珍しく、牛のたくさん集まる場所であるからこそ見られる、という意識があったのだろうか。

川田啓介氏は、浮世絵に描かれた牛について分析した文章のなかで、高輪の白黒まだら模様の牛について言及している(9)。すなわち、当時の在来種には黒牛が多く、浮世絵に描かれる牛も黒牛が大半であるが、高輪の車町を描いた浮世絵には白黒まだらの牛もしばしば見られる、と指摘したうえで、「最盛期よりも車町の規模が縮小した幕末においても、高輪といえは牛、しかも白黒斑など様々な毛色の牛がいることが、浮世絵の題材となるほど広く知られていたのではないだろうか」と説明している。

江戸時代、版本や浮世絵以外にも、即位や行幸を記録した絵巻や屏風、長谷川派や琳派の絵画作品などに、白黒まだら模様の牛を見出すことができる。さらに室町時代(一六世紀)の風俗図や、鎌倉時代(一二〜一四世紀)の物語絵巻にも少なからず見られることから、画中の牛の毛色として、白黒まだら模様はひとつの定型であったものと推察される(10)。

白黒まだら模様の牛の毛色は、古くから絵画に描かれてきた毛色であった。江戸時代には比較的珍しい毛色として浮世絵などに描かれていた。

### 五 現実の牛の毛色との類似性

絵画に描かれ土人形にもみられる白黒まだら模様の牛は、古くから日本に実際に存在した牛の毛色を反映しているのだろうか。

大木卓氏は、鎌倉時代までの、古辞書や日記、文学・説話などの文献資料と、絵巻物などの絵画資料から、古代(主に平安時代後期から鎌倉時代)の日本で畜牛に見られた毛色を概観し、どのような毛色が好まれたか嫌われたかについて言及している(11)。大木氏によれば、古代、在来牛には、黒色・黒と白のまだら・褐色・褐色と白のまだらなど各種あったが、黒色系が大半を占めていたという。また、古代に貴族が乗用とした牛車の車牛には、額に白い星がある牛や、腹や脚先の白い牛、均衡のよい白ぶちのある牛など、「派手な毛色」が好まれたと指摘している。

大木氏も参照している鎌倉時代末期の「國牛十図」(図13～15)は、河東牧童(寧直麿)が各地の名牛を紹介したもので、延慶三年(一二三〇)に成立した。原本は失われたものの、江戸時代の故実家・藤原貞幹による安永七年(一七七八)の模本やその写しが、今に伝えられている(12)。現実の牛を、体格や毛色などの特徴を意識しながら写実的に描いているという点で、大いに参考になる資料である。

実際に、鹿児島県トカラ列島の口之島牛は、明治以前の在来牛が野生の状態に残されているというが、その体格や毛色は「國牛十図」に描かれた牛と類似するという。とくに、口之島牛は毛色に多様性があるが、「國牛十図」に描かれた牛の毛色と一致するものが少なくないことが指摘されている(13)。

土人形にみられる牛の毛色を、「國牛十図」と比較して見ていきたい。まず(A)「腹から脚にかけて白く、その他は黒い。黒い部分に白い模様がある」という土人形の牛の毛色について。「國牛十図」では、「河内牛」(図13)が近く、腹と前足、後足の蹄近く、また尾の付け根に白い模様が入っている。また、腹部がわずかに白い黒牛の「越前牛」や、腹が白く背は茶色がかっている黒牛の「丹波牛」「遠江牛」(図14)も、近



図13  
河内牛



図14  
遠江牛



図15  
筑紫牛

図13～15  
「國牛十図」  
(国会図書館デジタル  
コレクション)

い毛色と考えられる。

なお、大木氏のあげた文献のうち、『枕草子』には「うしは、ひたひいとちひさくしらみたるが、はらのした、あしのしも、尾のすそしろき」ものが好ましいと述べられている。ここに描写された毛色は(A)と類似するものといえよう。

次に(B)「頭と尻が黒く、脇腹から背中にかけては白い。白い部分に黒い模様が入ることもある」という土人形の牛の毛色について。「國牛十図」では、黒ではなく茶と白のまだらではあるものの、「筑紫牛」(図15)が比較的近い。しかし茶の部分がまだ多く、いわば(A)(B)の中間的な模様といえる。

最後に(C)「全身が白く、小さめの黒い模様が点在する」という土人形の牛の毛色について。「國牛十図」には類似する毛色はみられない。しかし四章であげたとおり、江戸時代の版本挿絵には、(C)に近い毛色や、(B)(C)中間的な毛色がしばしばみだせる。「國牛十図」の成立した鎌倉時代から江戸時代へと至るまでに、交配がすすむことでより(C)のまだら模様につながるような変化が見られたのだろうか。畜産・遺伝の分野からの見解を得たいところだが未見である。あるいは(C)系統のまだらは、(B)系統からの写し崩れで実際にはない毛色が表現されたのかもしれない。また、明治時代以降知られるようになった、ホルスタイン種などの外来種の毛色が、土人形の彩色に反映された可能性もある。

なお、『日本山海名物図会』『天王寺牛僧』(図11)の中央で真後ろを向く牛の(C)に類似する毛色は、(A)(B)よりは黒い模様がぼんやりと表現されていることから、境界線のくつきりとした模様に入るまだらとは、少し違った毛色を表現したのもかもしれない(14)。また、左どなりに描かれる背中白い牛は、「國牛十図」の「遠江牛」(図14)や「丹波牛」など、黒い牛の背中に明るい茶色が広がる毛色を表現したものとも考えられる。管見の限り、土人形にはそうした毛色の表現はみいだせない。

以上、「國牛十図」との比較によって、江戸時代の土人形や版本・浮世絵、またより古い時代の絵画に描かれたまだら模様の牛は、鎌倉時代から日本にみられた実際の牛の毛色を、直接ないし間接的に、ある程度意識して表現したものであろうことが推察される。

## おわりに

伏見人形はじめ、各地の土人形に見られる牛の毛色について、白黒まだら模様の毛色を中心に考察した。

白黒まだら模様の牛は鎌倉時代から存在し、黒牛が主流である中で、見栄えのする派手な毛色と認識されていた。絵画にもしばしば描かれていたことから、土人形の牛の彩色にも取り入れられた。一九世紀半ばの伏見人形においては、牛の彩色といえは白黒まだら模様がすでに定番であり、各地の土人形の牛にも、同様のまだら模様が少なからず見られる。

なお、江戸時代には、白黒まだらの毛色をした犬(狛)・猫・鼠・兎が愛玩用に飼育されており(15)、伏見人形の犬(狛)・猫・鼠・兎にも、白黒まだらの毛色をみることが出来る。牛は愛玩動物ではないが、こうした好みも、土人形の牛の彩色に間接的に影響した可能性も考えられる。

また、黒い体に白い模様が入る(A)系統よりも、白い体に黒い模様の入った(B)系統が多いのは、制作工程上の効率の良さが影響したのかもしれない。伏見人形は下地として全体を胡粉で白く塗ったのちに、白以外の絵の具を重ねて彩色する。白い模様を塗り残すように全体を黒く塗るよりも、黒い模様を白い体に点在させる方が、彩色は容易であろう。

型で伝承されるフォルムと違い、彩色は恣意的な変更がたやすい。にもかかわらず一定の傾向や特色がみられるということは、その彩色になんらかの意味が込められていたか、なにがしかの手法があった、あるいはすでに伝統的な様式と認識されていたものと推察される。彩色についての考察は、背景にある嗜好や風習を知ることや、土人形の様式、技術的な影響関係を知らるのに、役立つのではなからうか。

今回、奥村コレクションという、限られた視野での考察にとどまったが、今後、より幅広い作例に触れることを心がけていきたい。

## 【註】

- (1) 大西重太郎・奥村寛純『伏見人形の原型』(一九七六年)。
- (2) 高槻市立しるあ歴史館『伏見人形とその系譜』(二〇〇七年)。同『高槻市文化財調査報告書第二九冊 郷土玩具奥村コレクション—伏見人形—』(二〇一二年)。
- (3) 河野通明「農耕と牛馬」中澤克昭編『人と動物の日本史—歴史のなかの動物たち』(吉川弘文館、二〇〇九年)。
- (4) 川崎巨泉『おもちゃ図譜』第五集(一九三二—一九三五年初版、一九七九年村田書店より復刻)。「幸右衛門型の土牛」として紹介される。ただし色は「肉色と鼠色の二種」とあり赤茶色とは異なる。肉色(肌色)や鼠色の一文字は奥村コレクションにはみられない。

(5) 公益財団法人イケマン人形文化保存財団・博物館さがの「国登録有形民俗文化財 京都の郷土人形コレクション総目録」(二〇一一年)には、江戸末期から昭和時代のものとして伏見人形が収録されている。黒牛、白黒まだら模様の牛のほかに、赤茶色の「俵牛」「明治大正」、白牛の「寝牛」「大正昭和前期」「牛と布被り男」(大正昭和が見られる)。

(6) 石沢誠司「土人形はなぜ作られたのか」伏見人形を中心に『郷玩文化』巻九・一〇号 通巻一八二・一八三号(二〇〇五年)。

(7) 各地の土人形の概要については主に斎藤良輔「郷土玩具辞典」(東京堂出版、一九七一年を参照)。

(8) 高槻市立しるあ歴史館「錦絵と土人形に見る江戸の人気者—源平合戦から忠臣蔵まで—」(二〇一六年)。

(9) 川田啓介「連載 浮世絵にみる牛との関わり」③・④ 牛車による輸送(1)・(2) 一般社団法人畜改良事業団「L I A J News」一六〇号・一六一号(二〇一六年)。奥州市牛の博物館HP ([www.isop.ne.jp/arumi/haku.html](http://www.isop.ne.jp/arumi/haku.html)) 企画展「第一五回企画展 浮世絵にみるウシ」(二〇〇四年)。

(10) 「平治物語絵巻」六波羅行幸巻(一三世紀、東京国立博物館)、「紫式部日記絵詞」(一三世紀、藤田美術館)、「狭衣物語絵巻」断簡(四世紀、東京国立博物館)、「北野天神縁起絵巻」土佐光信(一六世紀、北野天満宮)、「堅田図」伝土佐光茂(一六世紀、東京国立博物館)、「月次風俗図屏風」(一六世紀、東京国立博物館)、「寛永三年後水尾天皇二条城行幸絵巻」(年代不詳、しるあ歴史館)、「明正天皇御即位行幸図」(一七世紀、御物)、「天稚彦物語絵巻」(一七世紀、サントリ美術館)、「閑屋澤標図屏風」(俵屋宗達)(一七世紀、静嘉堂文庫)、「樹花鳥獸図屏風」(伊藤若冲)(一八世紀、静岡県立美術館)、「牧童図」鈴木其一(一九世紀、個人蔵)など。

(11) 大木卓「本邦古代畜牛の毛色に関する資料」東京獣医学畜産学会『東京獣医学畜産学雑誌』八号(一九五七年)。

(12) 東京大学農学生命科学図書館所蔵本(『群書類聚』所収、註13志村編文献所収)、国会図書館所蔵本、西尾市岩瀬文庫所蔵本など。

(13) 黒澤弥悦「ウシ 離島に息づく古代の牛」西本豊弘編『人と動物の日本史1 動物の考古学』(吉川弘文館、二〇〇八年)。志村隆『フィールドベスト図鑑 特別版 日本の家畜・家禽』(学習研究社、二〇〇九年)。

(14) 註10のうち「寛永三年後水尾天皇二条城行幸絵巻」、「牧童図」にみられる牛も同様である。

(15) 梶島孝雄『資料 日本動物史』(八坂書房、一九九七年)。平岩米吉『猫の歴史と奇話』新装版(一九九二年)。安田容子「江戸時代後期上方における鼠飼育と奇品の産出」『養鼠玉のかけはし』を中心に『東北大学国際文化学会』『国際文化研究』一六号(二〇一〇年)。

発行日 二〇一九年三月一六日 編集・発行 高槻市立しるあ歴史館

大阪府高槻市城内町一番七号・☎〇七二(二六七三)三九八七

◆本ホームページ・高槻市ホームページ「インターネット歴史館」内掲載

[http://www.city.takatsuki.osaka.jp/rekishu\\_kanko/rekishu/](http://www.city.takatsuki.osaka.jp/rekishu_kanko/rekishu/)

[rekishikan/chosa/shiroato/shiroato\\_dayori/index.html](http://rekishikan/chosa/shiroato/shiroato_dayori/index.html)